国際協力特別賞

世界を知る

沖縄県立那覇国際高等学校　2 年
垣花　莉穂

「あの人達は誰？」そう聞く私の目の前にいたのはバラやアクセサリーなどを手に持ち売り歩いていた黒人の人たち。彼らは、北アフリカ等からやってきた移民だという。私のホストマザーが教えてくれた。

私は高 2 の夏から 10 カ月のイタリア留学を経験した。私は留学先で初めて、移民の人達を目の辺りにした。日本ではニュースで聞く言葉だけでどんな人なのか知りもしなかった。

移民とは、居住国を変更して住む人の事でこの定義によれば 10 カ月の留学をしていた私も一時的な移民となるから驚きである。

しかし私は今回、経済的な理由から居住国を変更した人々について考えたい。
彼らはローマなどの大都市だけでなく、郊外の小さな街にも沢山いた。そして近所のスーパーマーケットの店頭や公園、駅、レストランの中など、物を売りにどこにでもやってくる。しつこく喋りかけてくる人もいれば、ただ何も言わず商品を見せてこちらが反応を返さなければすぐに去っていくという人もいた。

実際、現地の人は移民についてどう思っているのだろうか。
ある日、私のホストハウスに 1 人の黒人が大きな荷物を持ってやってきた。勝手に家の門を開けて入ってきたので庭に 1 人でいた私はとても驚いた。そして慌てて私は家の中にいたホストマザーに誰か知らない人が勝手に入ってきたと伝えた。するとさらに驚いた事に私のホストマザーは彼を見るなり「アントニオ！今日は何も買えないけど、その代わりに何か食べる物をあげるから待ってて」と言うと、家にあったパン、お菓子、ミネラルウォーター、りんご、と袋に入れて渡した。なぜそういう事をしたのかと聞くと、「彼はまだ若いし礼儀も正しい。もう２年くらい時々家に物を売りにくる。もし何も買わなくて家に食べ物があれば、可哀想だからよくこうして渡しているわ。」と言っていた。「アントニオ」とは私のホストマザーが彼の名前がわからないので勝手に愛称をつけたらしい。

その一方である人は、ローマで移民に対する反対運動が行われているテレビのニュースを見て、こう言っていた。
「移民は女の人や子供、老人をおいてきた若い男性が多いのに対して働かず、イタリア語さえも話せない人が多い。勉強する気もなく私達が働いて稼いでいるお金で生活をし、ただだらだらしているだけ、許せない。」と。

現在、イタリアで移民の数はどんどん増加し、2015 年には 100 万人を超えた。国では特に大きな対策もなく住民の不満や怒りも溜まるばかりでそこから差別問題等が起こっている事実もある。以前、私のクラスメートが物を売りに来る黒人を馬鹿にした。悲しかった。留学をしていた私も移民なのに、私には皆優しい。どうして彼らだけなのか、そしてその行為を目に何も言えなかった私は心が痛んだ。そして私だって留学生なのに、初めて物を売りに来る黒人を見た時には、怖いあまり関わりたくないと思ってしまっていた自分に気がついた。私も心のどこかで偏見の目を持っていたのだ。

世界には、移民問題の他にも課題は沢山ある。それらの問題は世界が他国の問題を他国の問題として捉えるのではなく、各国が一丸となり一緒に解決していく必要があると私は考える。そのためにも私はまず世界をもっと知りたい。留学を通して私にはテレビで見ていた外国の問題がただの遠い人達の問題ではなくなっていた。お互い価値観や考え方は全く違うがそれはお互いの個性であり、自分の世界を何倍にも広げてくれた。しかしまだまだ私には知らない事が沢山ある。これからは将来世界の力となれるようもっと勉強を積んでいきたい。今は若くてまだ小さな力かもしれない。しかしそれがいつか大きな力になると信じて。世界の人々と共に生きるために。